

**「令和6年度南陽市自分ごと化会議」からの
少子化時代の子どもたちの望ましい中学校
の在り方についての4つの提案**

～これからの南陽市の中学校を考える～

(中間案)

※第3回会議までの意見反映

2024年〇月〇日

「南陽市自分ごと化会議」委員一同

< 目次 >

- 1 「南陽市自分ごと化会議」の概要..... 4
- 2 「南陽市自分ごと化会議」からの提案..... 6
- 3 付録：アンケート結果

はじめに

無作為に選ばれた私たち委員は2024年9月から11月まで4回にわたって、少子化時代の子どもたちの望ましい中学校の在り方について議論を重ね、最終的には4つの提案にまとめました。

日本全国で進む少子化は、南陽市も例外ではなく、平成20年に268人だった出生数が、令和5年には140人に減少しています。中学生の数も、10年後には3割減少することが予測されています。この予測では、現在、市内にある3つの中学校は、児童生徒が集団の中で多様な考えに触れ、切磋琢磨することで資質や能力を伸ばしていくことができるとされる適正規模のクラス数を下回ることとなります。

適正規模に満たない小規模学校には一人一人にきめ細やかな指導ができる等のメリットはありますが、クラス替えや学年主任の配置といったことができなくなるといふこと、それを避けるためには中学校の統廃合の検討が必要となることを知りました。

そう遠くない未来にやってくる南陽市の中学校の未来について考え、あるべき姿を話し合った結果、南陽市民であるということ以外の共通点を持たなかった私たちに「将来どこにいても故郷を自慢できるような中学校生活を送ってもらいたい」という共通する思いが生まれました。この思いを叶えるため、私たち1人1人が、自分の考えを語り、幅広く議論しました。

部活動や他のことでも好きなことができ、先生や親、地域の大人たちが1人1人と向き合うことができる環境を作っていきたい、学びの質を維持していきたい、そのために、個人、地域、行政がそれぞれに何ができるかという視点で具体的なアイデアを出し合った結果、この提案書ができあがりました。

今回の自分ごと化会議では、現役の高校生やまだ子供や孫が小さい人、自分が南陽市で育ってきた人など、色んな背景を持った人が少子化時代の子どもたちの望ましい中学校の在り方という共通のテーマに「自分ごと」として向き合いました。

この提案を市としての考えに活かしていただくことを強く望むとともに、今まで以上に行政も私たち市民も一緒になって活発な意見交換が行われ、その場での意見が今後の南陽市のために活かされることを期待します。

令和6年〇月

南陽市自分ごと化会議委員 一同

1 「南陽市自分ごと化会議」の概要

(1) 名称

「南陽市自分ごと化会議」

(2) 委員の選出

住民基本台帳から無作為に抽出し、 委員参加の案内を送付した数	1000 名
応募（参加）した委員 （応募率）	23 名 (2.3%)

(3) 委員名（50 音順）

※ 承諾いただいた方のみ名簿に記載しています。

（意思確認前のため記載なし）

(4) コーディネーター

石井 聡 （逗子市福祉部長）

(5) テーマ及び各回の議論

- ・テーマ：「少子化時代の子どもたちの望ましい中学校の在り方」
- ・各回の議論

(ア) 第1回会議：2024年9月7日（土）

- ・自分ごと化会議の概要説明（構想日本）
- ・テーマについての現状と課題の説明（市）
- ・委員の自己紹介 など

(イ) 第2回会議：2024年10月6日（日）

- ・「南陽市の教育の現状」
「10年後の南陽市の中学校の在り方」などについて議論
- ・改善提案シートの記入（ほか）

(ウ) 第3回会議：2024年11月2日（土）

- ・ナビゲーターの参加
東京みらい中学校校長 文教大学客員教授 定野 司
- ・「適正規模校、小規模校のメリット・デメリット」などについて議論
- ・改善提案シートの記入（ほか）

(エ) 第4回会議：2024年11月30日（土）

- ・提案書（案）をもとに修正点について議論
- ・意見提出シートの記入（ほか）

※各回の議事録は南陽市 HP に掲載されております

2 「令和6年度南陽市自分ごと化会議」からの提案

以下の提案は、「少子化時代の子どもたちの望ましい中学校」というテーマに関して、私たち会議参加者が4回にわたって議論してきたことや各回で記載した「改善提案シート」の内容を中心にまとめたものです。

提案

1. 故郷を誇りに思える心が豊かに育つ教育環境をつくる

提案

2. 多様な選択肢、経験、出会いが提供される教育環境を作る

提案

3. 1人1人と向き合い安心できる教育環境をつくる

提案

4. 充実した学びが提供できる教育環境をつくる

1. 故郷を誇りに思える心が豊かに育つ教育環境をつくる

南陽市では、地域がもつ教育機能を連携・連動・一体化させた「地域総合型教育」を推進しています。幼保小中一貫教育を取り入れ、体験活動など「本物に触れる機会」を大切にする、地域に根ざした教育を行っています。

地元に残っていても、離れていたとしても、故郷である南陽市のことを想うことができるような心豊かな人柄が育まれる教育環境づくりに、市民総ぐるみで取り組んでいくことが求められます。

「提案1」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち 市民

- ① 小規模校の文化や特色を伝える工夫をしていく。
- ② 自分ごと化会議に参加する
- ③ 身も心も優しい人間の育成
- ④ 大人が子供たちをあたたく見守り、次世代を育む
- ⑤ 南陽市の知らない事を調べる

地域

- ① 地域住民に協力してもらう
- ② 子供たちの触れ合いや学校との連携と協力
- ③ 地域の行事への参加、手伝い
- ④ 地元の就職先をアピールする
- ⑤ 家庭内で自然に身につけていたしつけや知恵を学べる機会を提供する

行政

- ① 企業見学や企業研修の機会を増やしてもらう
- ② 故郷教育の強化、推進
- ③ 行事カレンダーの作成、配布
- ④ 各省庁のデータで今の世の中の状態を教えていく
- ⑤ 楽しい場所をつくる
- ⑥ 若者の興味あるようなイベントを考える

**その他の
主体**

- ① 子供たちに関心を持ってもらう
 - ② 農業、商業、保育等、研修授業の提供
 - ③ 若者の興味あるようなイベントを考える
-

«その他の意見»

- ・ 自分の地元で誇りや愛情を持つことが軸であれば、自ずと他のこともよく回るんじゃないかと思った。
- ・ 地方と都会の同世代の人が、お互いに自分の故郷のことをアピールし合えるようになることが、何より大切で、地元離れの対策になるかもしれない。
- ・ 地元愛を育て、地域の個性が分かることができる人になれるような進み方が出来ればと思った。
- ・ 将来自己紹介をする時に、自分はこんなことが学べる学校だったんだとか、こんないいところがあったと言える学校が良いと思う。
- ・ 小規模校でやっていたワラビ取り等の伝統行事や文化が、統廃合でなくなってしまうのは嫌だと思う。
- ・ 自分達の頃に比べて最近は精神も肉体も大人になっていると感じる。中学生の時から、将来生きていくのに必要な人を思いやる心をもっと教育していかないと間に合わなくなっているように思う。

2. 多様な選択肢、経験、出会いが提供される学校を作る

少子化が進み、生徒数が減少し、適正規模を保てなくなることにより、部活動が廃部になったり、各行事が縮小化されるなど、多様な経験をする機会が減少していくことが考えられます。これは、集団の中で多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくことが難しくなるということです。これらを解消するため、統廃合を含めた学校の配置の検討が必要です。行政や学校だけでなく、私たち市民や地域が、できることを考え、積極的に関わることで、中学生が多様な経験、機会、選択肢を得て、自身を持って社会に出ていくことができる環境を整えることが重要です。

「提案2」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち 市民

- ① 部活動の指導だけでなく、しっかりと話をする
- ② 会合、コミュニケーションへの参加
- ③ 経験や学んだことを提供する
- ④ これまでの人生で得た自分の経験を話す機会をもらう
- ⑤ 将来の夢を見つけるために地域全体で説明会などを行う

地域

- ① 話にあった地域の仕事の説明
- ② 地域交流の促進、提言
- ③ 地域の対応できる人が部活動の顧問を担う
- ④ 部活動の顧問は希望性で時間外の賃金を支給する
- ⑤ 学びや現在仕事のプロや研究者等を登録しておく（ボランティア）
- ⑥ 駅などに進路等の説明のスペースを作成
- ⑦ 進路等に関する資料などを渡す

行政

- ① 部活動に対する場所、資金面等のサポート、
- ② 他の中学校との積極的な交流
- ③ 学校の統合について推進する
- ④ 部活動に関わる賃金の支給
- ⑤ 指導者の人材の確保

- ⑥ 多様な進路に関する情報の提供
- ⑦ 一般の人と学校の橋渡しをする
- ⑧ 選択の幅を広げられるような取り組み
- ⑨ 社会を知る機会をつくる
- ⑩ 進路の説明会などへの参加

その他の

主体

- ① SNS 発信
- ② 有志による部活動の指導

«その他の意見»

- ・ 自分の子供が小学生の頃、学年の縦割りで行事をして、上級生と下級生が関係性を作っていた。やっぱりそういう関係が大切だと思う。
- ・ クラスが少ない、先生方が少ないということは、中学生時代に自分と関わってくれる大人が少ないということ。色々な大人がいるということ学ぶ機会が減ってしまう。子どもにはいろんな人と関わってほしいなと思う。
- ・ 自分は、経験にないことがたくさん起こるとそれだけでとても成長できた。
- ・ 小さいうちに、早い段階でそういういろんな人と関われる場とか、いろんなタイプの人と関わったり、いろんなことを経験できる場があることが大事なかなと思う。
- ・ 小学1年生の子供を持つ娘が、早く統合して、大きくなった学校でいろんな選択肢をいっぱい選べる方が子供にとってはいいんじゃないかと言っていた。
- ・ 伸びる子供たちだけに焦点を合わせるのではなく、困っている子供も同時進行でフォローしながら自分のやりたいことをどんどん世界に出ていくような子供たちの才能を伸ばしてあげたい。
- ・ どんどん技術者が足りなくなっていると聞く。工業高校や技術系の職業に興味を持つきっかけを持てる場がたくさんあることが大事なかなと思う。
- ・ 以前、住んでいた地域では、外国人が多く、子どもたちに偏見がなく、不登校の子供も受け入れてくれた。南陽市の子供たちもそうであつたらうれしい。

3. 1人1人と向き合い安心できる教育環境をつくる

子供たちは1人1人がそれぞれに違った性格、考え、悩みを持っています。小学校から中学校、中学校から高校に上がるタイミングでギャップを感じることもあります。こういった1人1人にしっかりと向き合い、対応することができる環境を整えることは、小規模校においても、統廃合を含めた学校の配置を検討した先にある適正規模校においても変わらず大切なことです。スクールカウンセラー等の配置に加え、先生や親、地域の大人が子供たちを見守り、支えることができる環境、居場所をみんなで協力して創り上げていくことが求められます。

「提案3」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち 市民

- ① 仕事でも、様々な相談に対して学校と家庭それぞれの課題を繋いでいきたい
- ② 地域との交流で他の子の話を聞く
- ③ あいさつ、声がけをする
- ④ 遠慮なく話し合いをする
- ⑤ 行政で働くものとして、それぞれの個を大切につないでいく機関の連携
- ⑥ 中学校の実情を把握する
- ⑦ 地域の学校に関わる

地域

- ① ボランティアとして学校と繋がれる方への呼びかけ
- ② 学校や公園の安全な環境づくり
- ③ イベントや行事を開催し、学校等との協議を計る
- ④ 対話のできる環境をつくる
- ⑤ 通学手段への協力、学力、体力UPへの協力
- ⑥ 子育て世代のサポート体制やつながりをつくる
- ⑦ 学校以外の子供の活躍の場をつくる

	⑧ 地域の先生による学校のサポート
行政	① 教員（担任）負担増ではなく対応できる職員の配置を行う
	② 危険個所 ハザードマップの作成
	③ 理念、方向性を打ち出し環境作り
	④ 行政は形を作り見守る
	⑤ 子ども家庭センターによる切れ目ない支援を深めていく
	⑥ 教育委員会や学校につなぐ
	⑦ 個人、地域への要請、情報の発信
	⑧ 学校への専門指導員の配置
	⑨ 赤ちゃん訪問など長く子育てを見守る行政による素地を作り関わる
	⑩ 教育課程、学び方の見直し
	⑪ 心理学の簡単な研修を実施（いじめを行ってしまう人の心境など）
	① ポイ捨て防止、不法投棄の防止の呼びかけ
その他の主体	② 先生、スクールカウンセラーなどの質の向上に努める
	③ 受け皿、相談の場として学校以外の子供の居場所
	④ 子育て世代の居場所づくり

《その他の意見》

- ・ 不登校はもう珍しいことではなく、不登校かどうかはそんなに重要じゃないのかなと思う。学校に行かない選択も含めて、それも多様性の一つだと思う。
- ・ 3校あるうちの1校は、少人数の学校は和気あいあいとできる校風で、別の中学校は多いところは、しっかりと質が保たれた校風という風に分けて、選択できるようになれば、行きたい学校を選ぶことができるということもできるのではないかな。
- ・ 行事や合唱コンクールでうまくいかなかった時に友達との関わり方を考えたり、怒られた時の対処法を学んだことで大人になってからもしなやかに生きられるようになった。失敗できる場としての中学校が大事だなと思っている。

- 子供たちだけでなく、子育て世代の同級生が、どこかでつまずいてしまっている人もいるので、子育てしている人をロングスパンで見守る仕組みが必要だなと思った。
- 地域の不登校児のケアをしている方から、生徒が高校卒業資格を取りたいといったタイミングで、カタカナや漢字が書けないという子がいるのに気付いたという話を聞き、そういった最低限の教育を受けられる場所を作る必要性があると思った。
- 少しでも学校で過ごせる時間を増やせるような関わり方をしてほしい。
- 地域の人が話し相手になったり、守ってくれる人がいることが大事。
- 子供に一番近い親や教師、同級生がどう向きあうかが大事。

4. 充実した学びが提供できる教育環境をつくる

少子化が進み生徒数が減少すると、それに合わせて配置される先生の数も少なくなり、今までの学びの水準を維持することが難しくなっていきます。解決策としての統廃合も選択肢に入れるとともに、人材リソースが限られてゆく中で、行政や学校だけが大きな負担を負うのではなく、私たち地域住民や民間事業者が教育の充実のためにできることを進め、地域全体で学びの質を高めていくことが必要です。

「提案4」の実現に向けて、それぞれが行うこと

私たち	① 目的にあった学校を選ぶ
市民	② 行政への働きかけ
地域	① 教職員以外の支援、退職した教職員の活用 ② 遠くにも通学する手段、バスの運転など
行政	① 子供達の教育環境を整える（目的にあった学校） ② 段取りよく統合する
その他の主体	① 学習塾との連携 ② バスの手段、民間委託

«その他の意見»

- ・ 免許外で家庭科を教えている知り合いの先生が、専門外の家庭科は自分も学び直す必要があり、先生方の負担もものすごいと言っていた。
- ・ 先生としても、同じ教科を担当担当する先生が他にいるのであれば心強いと思った。
- ・ ある程度の人数がいて、先生もいてという学校の方が良いと思う。
- ・ 教員をしていて、最近の教育が過渡期にあると感じる。こういうふうな学びであるべきだということと、求められる学力が違うと感じる。